

[書評]

Soda Ryoji (2007) *People on the Move: Rural-Urban Interactions in Sarawak*. Kyoto: Kyoto University Press. xvi+253pp.

市川 昌広 (総合地球環境学研究所)

本書は、サラワク州のイバン人を対象にした移動研究の成果である。イバン人は、これまで、ブジャライという旅行き慣行などから移動性が高い人々として知られてきた。本書では、近年、急速に進むプランテーション造成、都市化などの社会的変化の中で、イバン人の移動性の高さがどのように生かされつつ、生活戦略がたてられているのかを明らかにしている。

本書は3部9章からなる。第1章で、先行研究の整理、イバン人の移動性について検討する際の着目点をまとめたあと、第2章では、マレーシア・サラワクにおける今日のイバン人の社会的な位置づけについて示されている。おもなフィールドワークは地方都市のシブとその近郊のカノウィット県でおこなわれており、第3章にそれらの地域の概要が述べられている。

第2部の第4章から第7章にかけては、フィールドワークにより集められた事例を基にした議論が展開されている。第4章は、村に住むイバン人の視点からのフィールドワークの結果であり、調査村での生業や賃金労働などによる生計の立て方が検討されている。近年では、これまで報告されてきた単身で短期的な出稼ぎによる移動だけではなく、家族を伴い都市に長期間定着しての就労が増えている。村の人口は減少しているが、そこは都市に暮らす人々のセイフティーネットとしての役割を果たしていることを明らかにしている。第5章は、都市に住むイバン人の視点から彼らの生活戦略を描いている。シブにおける暮らしの社会的・経済的な難しさに対応するために、イバン人たちは出身村とのつながりを維持することを重要視している。第6章は、シブおよびカノウィットにおけるイバン人の政治的な動きについて、彼らの選挙や投票活動を事例にして検討している。シブに住むイバン人は、都市の生活改善に加えて、彼らの出身村(夫および妻の村)のインフラ整備などにも強い関心がある。サラワクでは、選挙の票は選挙区への開発誘致と強く結び付いている。そこで、夫がシブで、妻が出身村で投票するなど、家族構成員が異なる場所で投票することにより、現在および将来の生活場所の改善や確保を目指している。一方、村の選挙では、大規模な土地開発の受け入れが最大の争点となった事例を紹介し、マレーシアの開発主義を背景としたイバン人の行動を描いている。村でのリーダーシップについても議論している。今日、イバン人の村の多くの村長は村に在住するのではなく、通常、都市に暮らしていることが多い。都市で得られる政治や開発にかかわる情報や人とのつながりが村でのポリティックス人も大切なのである。第7章は、都市に住むイバンの将来的な帰村意志について、村における財産との関係から議論している。都市に住むイバンは、将来の帰

村を彼らの親や兄弟姉妹との関係、親が持つ財産などを考慮しながら、夫方・妻方のどちらの村に帰るか、帰村した場合の生計の立て方を計画している。従来いわれてきた「家族」(Freeman 1955)の在り方は、近年、生計をたてる上で有利になるよう変化してきていることを明らかにしている。

第3部の第8章では、いくつかの研究上の課題が議論されている。本書の特徴は、移動について農村と都市の両方の視点からイバン人の移動について検討したことである。その結果、これまでのように都市と農村を二項対立的にみるのではなく、両者を一つのユニットとしてとらえることに成功している。このことから、イバン人の移動について migration ではなく mobility、migrants ではなく movers であるととらえている。第9章では、本書の結論として、イバンが mobility を維持したエイジェンシーとして社会的な存在意義を得ていくという、一つのエイジェンシー論の可能性を示唆している。

評者は、これまでイバン人の森林資源利用についての研究をおこなってきた。いわば「村」側での研究をおこなってきたわけである。村で持続的に生計を維持していくための基盤となっているのは、二次林の存在であると考えている(Ichikawa 2004)。イバン人は、ときどきで最も儲けがあがる林産物や作物の生産をおこない、それに焼畑など自給のための生業を組み合わせ暮らしてきた。二次林は、将来、もうかる可能性のある林産物が眠っている場であり、新たな作物を栽培する場でもある。村では、広大な二次林の存在により暮らしのレジリアンスは高められている。そうした二次林は未開の原生林を拓くことによって占有権を得られる。

サラワクでは、近年、都市の人口比率が急速に高まり、今日では州の全人口の半分以上が都市住みとなっている。本書を読みつつ得た都市と村を生きるイバン人のイメージは、彼らが生活のレジリアンスを高めるために、もはやほぼ皆無となった原生林の代わりに、都市という彼らにとっての未開地の開拓を創意工夫しながらおこないつつ、そこでの社会的地位を獲得しようとしている姿である。出身村との強いつながりを保とうとしている彼らにとっては、村のロングハウスがまだ本宅で、都市の住まいは出作り小屋(langkau)あるいは Freeman(1955)のいう *dampa*(数世帯が集まった小ロングハウス)なのかもしれない。イバン人は、都市という未開地を開拓したあと、どのようにして村の二次林の場合のようなより安定的で強い「占有権」を確保しようとするのであろうか。そのようなことを考えた。

都市と村を一つのユニットとしてとらえることによって新たな研究の領域を開こうとしている著者の今後の研究に期待したい。

参考文献

- Ichikawa, M. 2004. Relationships among secondary forests and resource use and agriculture, as practiced by the Iban of Sarawak, East Malaysia. *TROPICS* 12 (4). 269-286.
- Freeman, J.D. 1955. *Iban Agriculture: A Report on the Shifting Cultivation of Hill Rice by the Iban of Sarawak*. London: H.M.S.O.